

Junichi Araki

荒木潤一

「釣れなくてもいい」
遠征に来た仲間がそう言った時、
僕はこの島を改めて誇りに思った。

五島列島といえば、男女群島を含めて古くから釣り人のメッカとして有名である。近年はヒラスズキやヒマサなど、ルアーフィッシングのターゲットも人気だ。もちろんそれらフィッシングターターの魚影も濃く、毎年多くの釣り客が訪れている。僕の身近にも、i ma テスター仲間をはじめ、毎年のように遠征してくる友人知人が数多くいる。彼らの多くはヒラスズキに魅せられ、中には年に何度も訪れるジャンキー・アングラーも存在する。しかし毎回確実に釣れるという訳にはいかない。島の自然は常に寛大というわけではなく、冬場に至っては滞在期間中に一度も竿を出せないなんてこともあるわけで、バイトすら得られずに帰るなんてこともあるだろう。それでも何年も通い続ける彼等は「釣れなくてもいい、島に癒されるんだ」と言う。僕ら島の人間にとつてそれは褒め言葉で、我が島を誇りにさえ思ふものだ。

足しげく遠征してくるアングラーは、サラシから



躍り出るヒラスズキを毎夜夢見つつ、何日も前から入念に準備し、海を渡って来る好奇心に富んだ探検家だ。ホームを離れて体力の限り一日中磯を駆け、そしてついにサカナを手にしたアングラー達の笑顔はサイコーに輝く。無機質な漆黒の溶岩磯と真っ白なサラシを背景に、磯の王者たる風格漂う銀鱗と、興奮を隠せない釣り人の笑顔。僕はこれを共有したくて来島を心待ちにしているわけだ。「遠方からのまれ人を歓迎せよ!」というのが、島のアングラーの大憲章。何度も通いたくなるような遠征釣行になるよう、出来る限りのサポートをしていきたい。同時に遠征アングラーには是非大物を釣って帰ってもらいたいと願う。ところがその反面、簡単には釣れないでもらいたいとも願う。もちろんそれは、何度もトライしてもらいたい、何度も来島してもらいたいという想いからだ。島のアングラーは寂しがり屋でもあるのだ。

僕は普段「アラキ管工」という建築設備工事業



の自営をしている。その合間を縫ってのプライベート釣行と、島に来るアングラーを迎え見送る日々。遠征仲間からは、もはや「アラキ観光」に社名変更しろなどとも言われている。もう少し歳をとったらそれもいいかな…。仕事と趣味の両立というのはなかなか大変なものだが、釣りがもたらす何かがあるゆるストレスを緩和しているに違いない。そもそも、僕の全てのモチベーションの根源はアングラー達の笑顔だから、釣れても釣れなくても全く関係ない。大自然の織りなす空気と時間の流れの中で僕は一緒に「喜憂し、夕暮れに笑う。コレが最高ののだ。」

釣りに出会う、それは人生に無くてはならないものになってしまった。釣り本来の趣、そして釣りが繋ぐ人と人。いつまでも変わらない島の自然に畏敬の念を抱きつつ、これからもこのスタイルは変わらず続けていきたいと思う。